

山本沙姫
表紙イラスト／平

試し読み版

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

宇宙海賊
ブルイーン



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『宇宙海賊アルフィーナ 淫獄編』
『宇宙海賊アルフィーナ 逆襲編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



宇宙海賊
アルサーナ

登場人物紹介

Characters

アルフィーナ・ヴァレン

銀髪が印象的な美貌の女宇宙海賊。ロボットたちを率いて銀河系を荒らしまわっている。

ゼリダス

銀河保安官としてアルフィーナーを追う大男。全身を特殊合金製の強化服で包んでいる。

時は、23世紀の後半。飛躍的に発達した科学技術を手にした地球人類は、ようやく夜空に輝く星々の民に、仲間として迎えられるようになっていた。

交流を持つ異星種族は300をゆうに超え、ほぼ毎日世界中のどこかしらに、他惑星からの宇宙船が飛来している。

ある者は外交のため、またある者は惑星間貿易のため、さらにまたある者は観光や娯楽のためと、来訪の目的は様々。

しかし、中には邪な考えを抱いてやってくる者も、決して少なくはなかった。

ガッシャガッシャガッシャガッシャ……。

「うわっ！ なっ、なんだこいつらは……」

「危ないっ!! こっちにくるぞ——」

空に分厚い雲が垂れ込める、とある日曜の昼下がり。ドラム缶に似た青い円筒形のボディに二つの目玉を髻髻とさせるカメラレンズ。それに手と足をつけた、シンプルな外見をしたロボットが群れを成して買い物客でこつた返す歩行者天国を練り歩く。我先にと逃げ惑う人々を押しつけながら。

地球の小さな島国、日本。その首都にある一大繁華街、銀座。

異星人からも「ザギン」などという愛称で呼ばれ、親しまれているこの街に、地球産の

宝石や装飾品などを求めて、遠くの星々からお客が訪れることはもはや珍しくはない。

しかし、この日はいつもと様子が違う。白昼堂々、招かれざる客が来ているのだ。

「各ショップの店主に告ぐ！ 我々の目的はお宝にある。おとなしく差し出せば危害を加えるつもりはな——い！」

リニア鉄道のネオ新橋駅そばを走る大通り。劇場を有する老舗大型玩具店の脇に、大昔の帆船の姿を模した青い宇宙船が鎮座している。

そのメインマストのてっぺんに立ち、ウェーブのかかった長い銀髪を靡かせながら左手に握った拡声器で周囲に呼びかける、身の丈180センチ近くある背の高い美女こそがロボットを指揮して騒ぎを起こしている張本人。

「さあお前達。警告はしたから遠慮なくいたできてきなさいっ！」

ルビーのように赤く、大きな瞳をキラキラと輝かせつつ部下達に命令を下す彼女は、スツときれいに通った鼻筋と、鋭角に引き締まった頬から顎にかけてのラインという、端正な顔立ちをしている。

しかし、濃いアイシャドウと真っ赤な口紅。それに、右頬に稲妻のマークと左頬に不気味な目つきの髑髏という奇抜なメイクが残忍で神経質そうな印象を醸し出し、周囲の人に威圧感を与えていた。

「ロボルビーはその宝石屋。ロボプラチナンはその貴金属店に行つて。あ、ロボタル

トは向こうの通りのカフェで、何か美味しいスイーツをいただいきなさいねっ」

ヒュンヒュンと鋭い風斬り音を立てて、手下達に行き先を指し示す右手に握られた長さ1メートルを超える銀色のサーベル。その鋭い切っ先が、宇宙からの危険な来訪者の恐ろしい雰囲気さをさらに引き立たせる。

指先を出した肘までの長さがある黒い手袋をはめた、細くしなやかな腕を大きく振るのにつられて、二つ並んだバスケットボールを髣髴とさせる90センチオーバーの丸々としたバストが上下に激しく波打った。

肉付きのいい身体に纏っているのは、胸元と背中が大きく開いたノースリーブのレオタード状ボディースーツ。光沢のある黒い革製のそれは、透明感のあるきめの細かい肌の白さを引き立たせている。

股間のV字ラインは鋭角的に切れ上がっていて、腰骨のあたりからムチムチと張りのある太腿まで剥き出しになっており実に艶かしい。

尻回りを覆う部位も幅が狭く、Tバックというよりはまるで褌。縦一文字に走る双曲の谷間にキリリと食い込み、滑らかなカーブを描いた剥きたてのゆで卵のようにツルリとした桃尻がほぼ丸出しに近い形であらわになっている。バストと同程度の大きさがあいながら、自重で弛むこともなく引き締まった臀部もまた、巨乳同様ほんの少し動いただけでもプルンと大きく揺れるほど柔らかい。

全身に漲らせた大人の女性の色香を包み隠さず晒す彼女の名は、アルフィーナ・ヴァレン。銀河系の端々にまでその名を轟かせるお尋ね者の宇宙海賊である。

「へいつ、姐さん！」

「あつしらにおまかせくださいえ」

美貌の親分からの命令を受けたロボット達は、皆片手を挙げて威勢よく答えた。表情こそないものの、擬似的な感情プログラムがあるせいで、反応はまるで人間そのもの。

「いい返事ね、終わったらバッチリ整備してあげるからがんばってよっ」

やる気満々の部下達にウインクして答える銀髪美女は、怖そうな見た目に反して実に気さくな態度。小型とはいえ88体もあるロボット一体一体に好きなものにちなんだ名をつけ、日々自分でメンテナンスをするほど可愛がっている。

（ホント、いい部下を持ってアタシは宇宙で一番幸せな宇宙海賊だわ……）

パタパタと駆け出していく小型ロボ達を優しい目つきで見送ると、剣をキュッと引き締まった腰に下げた鞆に収め、腕組みして満足げに頷く。彼女にとって、彼らは単なる商売道具ではなく、家族といってもいい存在であった。

「くっ、まさかこんな大物がいきなり堂々と乗り込んでくるとは……」

「そもそも宇宙海賊は銀河警備隊の管轄だろう。連中は何してるんだ？」

略奪行為がはじまって5分ほど経ったころ、ようやく駆けつけた機動隊が海賊船をぐる

りと取り囲み、特殊合金製の盾で身を守りつつ銃を構えて様子を窺う。彼らには発砲許可は出ているものの、船体の左右にズラリと並んだ六対の巨大なビーム砲で狙われていては手も足も出ない。

ただ愚痴をこぼし、援軍が来るのを待つばかり。

「ふっ、腰抜けどもが……」

「姐さん、交差点の向こうの貴金属店で、鉄道模型とかいう何やら高価なものがありますけど、どうしやす？」

ただいるだけの正義の味方達を見下し、鼻で笑う大物海賊のもとへ、足早に甲板へ駆け上がってきた部下の一人が妙にはしゃいだ様子で呼びかけてくる。日頃から彼は、略奪作業の合間にアルフィーナに喜んでもらえそうな新たなお宝探しに余念がないロボットだった。

「もうっ、そんなものに興味はないわロボシルバー。いつも言っているけど、アタシが欲しいのは宝石と貴金属。それに甘いお菓子だけよ。ほらっ、仕事に戻りなさい」

まるで粗相をした息子を優しく諭す母親のように、美貌の宇宙海賊は穏やかな口調で語りかける。

「イエッサ……」

バシユッ！ ドガンッ！！

ボスの命令を聞いた手下ロボがサツと敬礼して立ち去ろうとした瞬間、突如天空から降ってきた光線に頭を撃ち抜かれ、木っ端微塵に吹き飛ぶ。

バビイイイイ——ッ！

さらに続けて、空から数えきれないほど大量の青白い光線が降り注ぎ、お宝を抱えて海賊船に戻りつつあったロボット達を次々と破壊していく。街に被害を極力出さないようにしているかと思えるほどの、正確な射撃で。

「はぎいっ！」

「あっ、姐さ——んっ」

ドドン、ドオオオ——ン！

「ロボダイヤ！ ロボメラルド！ み、みんな……」

悲惨な叫びを上げながら爆散する部下達の姿を目の当たりにして、華奢な握り拳が怒りにワナワナと震える。

バビイイインッ!!! ドガガガガッッ!!!

さらに続けて極太の赤い光線が飛んできて、海賊船のビーム砲を片っ端から破壊する。いつも部下ロボ達がお宝を集めている間、敵襲に備えて警戒するのはリーダーたる彼女の役目。いかに周りに集まってきたのが弱小な地球の機動隊とはいえ、気を抜いていたつもりはない。

「いったい、何が……うっ……」

光弾が飛んできたほうを振り仰ぐと、彼女は思わず声を詰まらせる。雲を切り裂いて白金色の円盤型宇宙船が静かに降りてきた。自分の海賊船より、はるかに巨大な機体が。

（あんなデカブツが来たのに気づかなかつたなんて……どんなステルスシステムを積んでいるの!? まさか、こいつが……）

予想もつかなくつた襲撃に戸惑うアルフィーナの脳裏を、あまり気にしていなかった噂話がよぎる。

ここ数ヶ月、彼女は大物の同業者が次々と姿なき宇宙船に襲われているという情報を、宇宙海賊が使う情報ネットワークから得ていた。百戦錬磨のつわもの達がろくに反撃もできなかつたという話は信じがたいものではあつたが、それが事実であると今はじめてわかつた気がする。

「……ん!? あ、あれは……」

部下を倒され、反撃の手段も封じられて戸惑う女宇宙海賊の目の前で、飛来した宇宙船のハッチらしきものが開く。そして、そこから巨大玩具店の屋上に注がれた淡い緑色の光の中を通つてメタリックグリーンに輝く、特殊合金製の強化服を纏つた戦士が降り立つ。

オートバイ用のフルフェイスタイプのヘルメットに似た仮面と、ウエットスーツ風の全身を覆う服の上に、甲高い電子音をキコキコと響かせて点滅する、大小様々な色の電飾を

施した装甲版を纏った身長2メートル近くはありそうな巨体の持ち主。

(こいつは……いったい……)

表情は仮面のせいで窺い知れないものの、装甲服越しにでも伝わってくる殺気が尋常ではなく、銀河に名を知られる女海賊も一瞬たじろぐ。

しかし相手は可愛い部下の仇。弱みは見せられない。

「きさま、何者だっ!!!」

「俺の名はゼリダス。お前を逮捕するためにやってきた、銀河保安官だ」

サーベルの先端を突きつけて、荒々しい口調で問いただすアルフィーナに怯みもせず、舞い降りた戦士は落ちていた低い響きの声で答えると、グッと握った右拳の甲を見せた。

そこには銀河保安官の身分をあらわす、斜めに三つ並んだ星型のマークが刻まれている。

「銀河保安官、だと……」

宇宙海賊をやっている以上、仕事中に邪魔者とでくわすことは多々あるが、これほど派手な姿の者は見たことがない。

「ふっ、おもちや屋の上に降りてきたから、どこかの玩具メーカーの宣伝かと思っただわ!」

憎き子分の仇をギラリと睨みつけ、気丈な女宇宙海賊は吐き捨てるように言い放つ。

「噂通りの減らず口の叩きつぶりだな。だが、それも今日までだっ!」

スーツをおもちや呼ばわりされたのに怒ってか、語気を荒らげた緑の戦士は左肩に仕込まれたレーザー剣を右手で引き抜き、両手を開いて飛び降りる。

「銀河にその名轟く宇宙海賊アルフイーナさまが、可愛い部下の仇もとらずに逃げたら名折れつてもんよ。受けてやるわ！」

いくら相手が単身戦いを挑んで来たとはいえ、上空で待ち構える宇宙船から攻撃されでもしたらひとたまりもない。危機的な状況にありながらも、誇り高き女宇宙海賊はメインマストを蹴って弾丸の如き勢いで飛び上がり、腰のサーベルを引き抜いて自分めがけて飛び降りてくる仮面の戦士に切りかかる。

地球の10倍以上は重力のある惑星、ティリグスター出身の彼女の体力は絶大で飛行こそできないものの生身で空中戦をやるぐらいは造作もない。

バギインツ！

光の刃と鋼の刃が激突し、激しい火花が飛び散る。

「なかなかやるな、実体剣のくせにビームソードを弾く……対ビームコートソードか。今時そんな古いものを使う奴がいるとはな」

「この剣をバカにするんじゃないわよっ！」

部下ロボットを破壊されたばかりか、愛剣までけなされて怒り心頭の気丈な宇宙海賊は眉間に皺を寄せ、二回三回と切っ先が見えないほどの素早さでさらに斬りつける。

彼女がここまで激しく怒るのは無理からぬこと。なぜなら、身につけているものから宇宙船にいたるまで、海賊家業に必要な装備はすべて、銀河の黒豹と恐れられた伝説の宇宙海賊である母から引き継いだものなのだから。

「チィッ！」

だが、立て続けの連撃が虚しく空を斬ると、アルフィーナは地面めがけて長い髪を逆立てながら落ちていく。いくら空中で戦う術を心得ていても、彼女ができるのは所詮は跳躍のみ。

いつまでも宙に浮いていられるわけではない。

「もらったっ！」

対して銀河保安官の緑に輝く強化服には重力制御の機能でもあるらしく、ジェット噴射もなしに自在に飛びまわっている。黒衣の女海賊が着地した瞬間を狙って、地面ストレスまでに素早く降下して、レーザー剣を振りかざしてきた。

「なんのっ！」

タタッ！ タッ！

しかし間一髪で攻撃を華麗なバックステップでヒョイとかわすと、アルフィーナは大型玩具店ビルに向かって飛び、壁を蹴ってさらに高くジャンプする。

「いつけえ

——つつっ！」

ゼリダスの頭上をとった彼女は空中で素早く反転し、憎き銀河保安官めがけ剣の先端を向けて落下した。

「なかなかタフだな、女のくせに」

しかし不意打ちに怯みもせず、仮面の戦士は余裕の口ぶりで告げつつヒラリと攻撃を右へかわす。

「タフすぎるのは損じゃないってねっ!!」

またも空振りに終わったが、アルフィーナにはまだ勝算があった。不敵な笑みを浮かべて言い放つと、彼女は道路に降り立ち、乗り捨てられた真っ赤なワゴン車をゼリダスめがけて蹴り上げる。

ガンッ!

「これでも喰らいなっ!」

いかに空中を自在に飛べる銀河保安官とはいえ、頭上からの攻撃を避けたばかりでは、そう簡単にかかせないと睨んでいた。狙い通り、強烈な蹴りでボディが凹んだワゴン車は、ゼリダスめがけて一直線に飛んでいく。

「こんなものが通じるかあっ!!」

しかし仮面の戦士は驚く様子もなく、目の前に飛んできた車をレーザー剣を縦に一振りしてあっさりと一刀両断。

バシッ！ ビシッ！ バシインッ！

「くっ、あつ、あうっ！」

汗ばむ白い背中が、できたてのプディングの如く柔らかく波打つヒップが、一打ちごとに赤く染まっていく。

「どうだ、鞭の味は？ 今まで大抵の女囚は最初は嫌がっていたが、すぐにぶたれるのが大好きになっていったが、お前もそうなるだろう？」

「そつ、そんなことあつてたまるかあつ！ この外道がっ！ それでも、くっ、ホントに銀河保安官なのっ！」

いかに宇宙の法と秩序を守る銀河警備隊とはいえ、もちろん捕らえた囚人に何をしても許される権限はない。自身の悪行を嬉々として話す銀河保安官に怒りを覚え、アルフィーナは鞭の痛みに顔を歪めながらも激しく罵倒する。

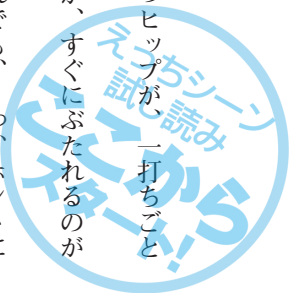
「犯罪者の分際で偉そうなことほざくなっ！」

ブオンッ！ バビリイイイイ—— ツツツ！

「ひっ、いやあああつっつ！」

一際勢いよく振り下ろされたレーザーウィップが、頑丈な革服の胸元を紙のようにポロボロに引き裂いた。薄紅色の小さな乳首を頂いた双乳が、大きく波打って飛び出す。

「ほう、荒っぽい口を利くわりにはずいぶんと可愛いお豆をつけているな。気に入ったぜ」



微かに蚯蚓腫れが浮いた乳房を覗き込みながら呟くと、鬼畜な保安官は柔肌に太い指が食い込むほど力強く握り締め、さらに指の間に鞭打ちの刺激で硬くしこった乳首を挟みこみ、グニグニとこね回す。

「あつ、くうつつつ……」

憎き自分の仇が押しつけてくる無遠慮な愛撫のせいで、胸の奥をゾワゾワとした悪寒が走る。

「くっ！ さつ、触るなあつ！ こつ、この……変態サディストめっ!!」

「まだそんな口を利ける元気があるか。ちよつと強めのお仕置きが必要そうだな」

刻々と我が身を汚される屈辱を味わいながらも、あくまで反抗的な女海賊の態度をよしとせず、ゼリダスは左手の人差し指と親指で、薄紅色の乳首をギュッと強く抓む。

ビリッ！

「あうっ！」

すると、洗濯ばさみで締めつけられるような痛みとともに、火照って微かに朱色を帯びた柔肌の中を、静電気の痺れに似た強烈な衝撃が駆け抜けた。

「さつきお前さんを無様に失神させたこいつはスパークアームといって、本来は犯罪者を麻痺させて捕らえるのに使うものだが、パワーを落とせば」

嬉々として説明しながら、装甲服の鬼畜保安官は腋の下や太腿、それに赤く腫れた臀部

と、次々に剥き出しの柔肌を抓り、同時に電気ショックを与えていく。

「ううっ、ひいっつ！」

短い悲鳴を上げるたびに、肉付きのいい柔らかな身体がビクビクと痙攣を起こす。

「こんな具合に、いい責め道具になるのさ」

「……くっ、そんな無粋なグローブ越しで女の身体に触ったって、はうっ……面白くも、

なんともないだろう？ 残念だったわねっ！」

「クククク、心配は無用だ。ハイパーメタルスーツを装着していても、手の平の感触は素

手同然にすることもできるんだぜ」

荒い息をつきながら悶える半裸の銀髪美女の背後に回り込み、ゼリダスは華奢な肩の上

に顎を載せてくる。

「この柔らかさも、温もりも、汗ばんで吸いついてくる湿り気も伝わってきてるぜ。それ、

に……」

そして粘り気のある口調で耳元で囁きながら左手で乳房を愛撫しつつ右手を股間へ伸ば

し、デルタゾーンに貼りついた黒革をずらして産毛一本生えていないスベスベの乙女の丘

を剥き出した。

「ほう、こんなきわどい服を着るとなると、やはりここは剃るんだな。ツルツルの肌の質

感が伝わってくるぞ」

赤みがかつた柔肌を数回こね回してから、冷たい金属板で覆われた人差し指が、汗でジツトリと湿り気を帯びた秘肉のスリットの中へ第一関節まで潜り込む。

ヌチュツ!!

バイイイイイイイ——ンンンン……。

「はっ! ひいひいひいひい——つつつ!!」

すると突然、ハチの羽音を髣髴とさせる耳障りなノイズとともに太い指がブルブルと震え、同時に柔肌に浴びたレーザーウィップに負けないほどの高熱を放ちはじめた。

「どうだい、痺れるだろう? こいつはバイブレーションアームといって、パンチやチョップの威力を超振動で強化する装置だ。フルパワーだと、一発殴っただけで五階建てのビルぐらい、粉々にできるんだぜ」

ブインッ、ブインッ、ブイイイイ——!

粘り気のある口調で得意げに装備を説明すると、鬼畜保安官は指をウネウネとくねらせながら、根元まで肉穴の中へ押し込んでいく。

「かふっ、あつ、あうううっ!!!」

「だが、ちよつと威力を弱めれば、こんな気持ちいいこともできる」

「だつ、だれが気持ちいい……なんて……うっ! あふうっ!!」

たとえ武器を失っていても、憎き敵に抗う気概まではなくしてはいない。しかし、スパ

ークアームの電撃で全身が痺れ、思うように抵抗できない。

「くっ、はあっ、んんっっっ！」

ただ長いシルバーへアーを振り乱して喘ぎ、足元の鏡の上に大きな水溜まりができるほどの愛液をポタポタと垂らすばかり。

(こんな奴に、汚されるなんて……)

ふと視線を落とせば、鏡に映った自身の股間の真下から見上げた様子が目に映る。不本意ながら溢れさせてしまった淫欲の証を絡め、キラキラと輝く金属の塊が無理やり抉じ開けられた秘所の中をかき回す、おぞましい姿が。

「こんなに厭らしい汁を垂らしていて、よく言う。ちゃんと指先に、厭らしい汁が絡みついてるのがわかるぞ。しかし……やはりここだけは直に触れたいものだな」

ジュポッ！

水気を帯びた音を立てて指を引き抜くと、ゼリダスはスーツの腰の右側についたボタンを押す。

カチッ！

「部分装甲、解除シマス」

すると低いトーンの機械的なアナウンスが鳴り、スーツの股間部分がパツクリと開き、赤黒い肉棒が姿をあらわした。

「そつ、そんな醜いモノ出して……どうする気よっ！」

鎌首をもたげるコブラの如くそそり立ち、数えきれないほどの青筋を網の目状に浮き立たせ、大きくエラの張った先端の割れ目から透明な粘液を滴らせつつビクビクと脈打つ醜悪な物体を目の当たりにして、恥ずかしさと怒りで真っ赤に染まっていた端正な顔がサツと青ざめる。

「妙なことを聞くな。決まってるじゃないかそんなの……」

怯える美貌の海賊の鳥肌立った太腿を掴み、大きく左右へ割り開くと鬼畜保安官はラヴ・ジューズでグツシヨリと濡れそぼった乙女のクレヴァスへ、いきり立った己が分身の突端を押しつける。

無論、それが何を意味するものかは彼女にはわかっていた。

「くっ、やっ、やめろおっ！」

大きな尻を振り、前身をくねらせて邪悪な雄蕊の進入を食い止めようとするものの強化服を着込んだ大男の腕力に敵うはずもない。

ゲヂュツ！

「ひいっ！ いっ、痛いっ、ああああ——っつっ！」

振動する指より太く熱い亀頭が、乙女の秘園を強引に押し開いた。さすがに気丈な銀河のお尋ね者も、女体のもつとも敏感な部位から走る、身を裂くかと思うほどの激痛には耐

えきれず、汗ばむ喉を大きく反らして叫ぶ。

「可愛い声出すじゃないか、いいぞお。女の泣き声というのはいつ聞いてもゾクゾクする……」

グリッ、グリッグリッ……。

アルフィーナの弱々しい反応にますます興奮したサディストの大男は、両腕に力を込めて彼女の肉付きのいい身体を自身の股間へと引き寄せる。無理やり抉じ開けた産道の中を、右に左に大きく蛇行しつつ、邪な欲望で膨れ上がった巨根が突き進んでいく。

「ひぎいっ!!!」

いきり立つ肉棒を伝わって、生暖かい処女の証が床へポタポタと垂れ落ちる。鏡に映った、引き裂かれんばかりに押し広げられた痛々しい女唇の姿を、赤く塗り消していくように。「ほう、エロいスーツを纏っているからてつきり経験豊富だと思いきや、初モノだったとは驚きだ。どうりで今まで捕まえたお尋ね者の女どもより締まりがいいわけだ」

今まで数々のお宝を奪ってきた美貌の宇宙海賊からもっとも大切なものを奪ったことに満足げに呟くと、ゼリダスは両腕を素早く動かし、抱えた獲物の肉体を貫いたまま上下に揺する。

グジャツ、グジャツグジャツグジュツ……。

「うっ、あうっ、あああ——っ、だっ、だめえっ!!」

今まで何者の侵入も許したことのなかった乙女の秘園が、凶悪な侵略者に遠慮なく踏み荒らされていく。硬い亀頭のエラで、膣壁をゴリゴリと擦りながら前後進を繰り返す極太のペニスは、一瞬たりとも留まることを知らない。機関銃の乱射の如き勢いで、腰のスライドを天井知らずに早めていく。

「ひいつ、いやあつ！ あうつ……」

プシュップシュップシュップチュツ……。

つながった秘部の隙間から乙女の汗と恥蜜のカクテルが雫となつてが噴き出し、密閉された鏡の部屋に、ハチミツをたっぷり注いだレモンティーのような甘酸っぱい香りを充満させる。

「どうだ？ 俺のモノは。んつ、デカイのでつ、くうつ、かき回されるのは……おうつ！ 気持ち、いいだろう？ んっ！」

荒い息をつきつつ、仮面の男は抗う術のない獲物の耳元で囁く。しかしはじめて男のモノを受け入れたばかりの彼女に、肉壺の奥底をかき回されることの快感はまだわからない。「あうつ、そつ、そんなこと、ないっ！ はうつ！」

「まだ物足りないか。ならばこれでどうだつ！」

激しく首を振るアルフィーナに対し、ゼリダスは火照った太腿を二の腕で抱えつつ、両手の先を股間へ伸ばす。

バシッ！

ビィィィ——ンツツッ！

「ひいつ、ひいいいい——っ!!!」

そして抉じ開けた肉割れの上端で、充血してプックリと膨らんだ紅色のクリトリスに指先を当てて、電撃と超振動を同時に浴びせた。女体のもっとも敏感な部位に襲いかかる心地いいむず痒さが、異形の物体を無理やり押し込まれる恐怖に強張る下腹部の緊張を解きほぐす。

グリユッグリユッグリユッグルリユリユッ……。

「かふうっ！ なっ、なんで……こんな……」

不本意ではあるものの、余計な力が抜けたおかげで若干緩みの出た膣壁は極太の雄蕊を受け入れられやすくなってしまった。硬い亀頭のエラで肉のトンネルをゴリゴリと擦りながら蠢く男根が、囚われの女海賊の胎内に一方的な快楽を植えつける。

(こんなやつ、殺してやりたいぐらいなのに……どうして……)

家族同然の部下ロボを壊された仇に身を汚される屈辱と、同時にもたらされる心地よさ。頭で否定しなくてはいけないとわかっていても、心と肉体が拒絶できない。二つの思いがぶつかり合い、湯あたりしたように頭がぼやけていく。

「そっ、そろそろ出してやる。覚悟しろよっ!!」

だが、気だるい気持ちは無理やり女の悦びに目覚めさせた当人によって打ち壊された。ドスの利いた大声を張り上げると、ゼリダスはさらに腰の動きを早めてラストスパートをかけてくる。

グジャグヂャグジュグチャッ……。

粘り気のある淫欲の調べを奏でつつ、激しくピストン運動を繰り返す肉槍の表皮がビクビクと小刻みに脈動し、射精の瞬間が近づいているのを密着する膈壁を通じて伝えてきた。「！ だつ、だめえつ！ なつ、中に……いつ、いやあつ！」

忌むべき敵の汚らわしい遺伝子の注入を避けるべく、アルフィーナは股間に突き刺さった雄蕊を抜こうと懸命に腰を捻る。

「うっ！」

ドビュルルルルルルル

ツツツツツツ!! ドグッドグッドグッ……。

だが不覚にも、彼女の最後の抵抗が最後の引き金を引いてしまった。火照った柔らかな肉壁に擦られる甘美な刺激に耐えきれず、肉欲の砲弾を蓄えた巨砲が火を噴く。

「あひうっ……そ、そんな……」

下腹部の奥底に、火傷しそうなほどの熱さがジワジワ広がっていくのを感じ取ると、彼女は全身の力が抜けてガックリとうな垂れる。

(アタシ……身体の中まで……汚されちゃった……)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>